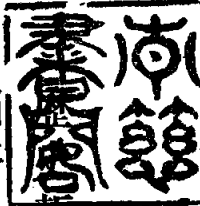


明治四十三年七月

史學
研究會
講演集
第三冊

東京
合資
會社
富山房發行

史學研究會講演集第三冊



目次

哲學の問題……………文學博士 桑木嚴翼……………一頁

國語史上の一疑問……………文學博士 新村出……………三

東國方言沿革考

古姜里城出土龜骨の説明……………富岡謙藏……………三七

我國に傳はれる波斯文に就て……………

……………文學士 羽田亨……………四九

馬場正通の生涯及其の著書……………

……………文學博士 内田銀藏……………二七

附錄 造幣策(馬場正通遺稿)

雜錄

京都沿革に就きていふ話……………田中勘兵衛…三七

本會記事……………二八三

挿圖目次

口 繪 古姜里城出土牛骨……………對頁

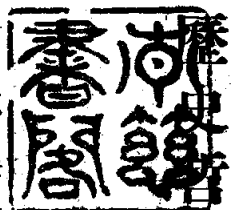
第一圖 古姜里城出土龜骨及同背……………二六

第二圖 日本卜用龜骨及鹿骨……………二六

第三圖 波斯文文書……………二六

第四圖 馬場正通書翰(其一)……………二六

第五圖 馬場正通書翰(其二)……………二六



歷史哲學の問題

桑 木 巖 翼

- 一、 歴史哲學に對する疑問——歴史及哲學の概念上の矛盾——歴史的法則に對する疑——世界史に對する疑——解答——法則と自由——學と形式——概括と特殊——目的と無意識
- 二、 疑惑と解答とに共通なる假定——超越觀と客觀說——哲學と直接經驗——知識學と形而上學——知識批評としての自然哲學——知識學としての歴史哲學——歴史認識論と歴史論理學
- 三、 歴史的事實の理會——史實の研究法——歴史的事實の構成——歴史的事實の合法性——史學の位置——歴史觀の諸派——歴史的事實の目的性
- 四、 歴史形而上學——歴史知識學の價值

凡て新しい問題を提出し若くは古い問題を新らしい形で陳述する場合には、それ／＼特別の言譯を要することである。即ち新らしいことに對しては何故にそれを述べなければならぬかと云ふ理由を明にし、古いことに對しては何故にそれを新らしい形に變じなければならぬかと云ふことを示さねばならぬ。今歴史哲學と云ふものは新らしくして同時に古い問題である、即ち我々が主として説かうとする點は比較的に新しい問題であるが、然し之に關聯して古い問題も新しい形となつて顯れる、其故に此事柄に對して二重に説明辯護をしなければならぬ必要があるやうに考へられる。然るに通常歴

史哲學と云ふ語を聞くと、多くの人は先づ斯學問の無用なことを唱へる。獨り一般の人ばかりでなく、歴史家の中にもさう云ふ考を持つて居るものが少なくない。併し無用若くは有用の區別は頗る相對的のもので、意味の取り様見方の如何に依つては、何れともなり得るのであるから、假りに歴史哲學が史實研究に必要でないと言ふ議論を唱へる者があるならば、一步進んで史實研究其物が果して人生に必要であるかどうかと云ふやうな根本の問題を提出することが出来るであらう、現に哲學者の方からはさう云ふ非難をして居る者も少なくない。それで此の用無用如何の問題は暫く差措いても宜からう、無用の用と云ふ語もある、或る場合に無用の觀を呈する者も後になれば非常に必要を生ずるかも知れない。其

故歴史哲學が無用であるからと云ふ點から、それに對する疑惑を提出されても、別に憂ふるに足らないが、併しそれよりも更に困難なる問題は歴史哲學が不可能であると云ふ議論である、我々は先づ其點から辯じて議論を進めて見たいと思ふ。

普通の解釋に従へば歴史哲學とは先づ歴史の哲學的原理若しくは歴史の哲學的解釋の意味である。第一の意味に従へば、歴史哲學は歴史的事實に關する一般の法則を發見して、出來るならば至高普遍の原理を組立てると云ふことにある、第二の意味に従ふならば、歴史哲學は普通の歴史家の編述した歴史上の事實に基いて其の連絡を探り、其間に存在して居る意味目的を探つて、世界古今の歴史を一貫的に説明をしや

うと試みるのである。前者の解釋に従へば、歴史は一種の社會學のやうなものになる、後者の解釋に従へば、歴史は一種の世界史のやうになる。所が此二つの解釋に對してはそれ／＼疑惑が起つて来る。元來一見すると歴史と哲學とは矛盾の概念のやうに思はれる。歴史と言へば變動雜多のものである、哲學と言へば純一不易のもの、のやうに考へられる。此全く矛盾した概念がどうして一に合することが出来るか、此根本的の疑問が今述べた歴史哲學の解釋に對して共に當筈まつて来る。

第一に歴史の法則を探ることに對しては、次の如き疑を起すことが出来やう。第一に、歴史は人間の行爲の記録であるが、此の歴史の題目たる人は自由の意志を持つて居るから、他の

自然物の如く必然の法則に支配せられて居らない、是故に自由なる歴史の世界に法則を尋ねることは、到底不可能である。と云ふ議論になる。次に縦令假りに何かの方法で法則を作ると云ふことが出来るとしても、其法則は歴史の特色たる時代國土の差別を超越して、頗る一般的な形式を取る代りに、全く内容のないものになつて仕舞ふから、他の自然科学の法則のやうに、種々の説明若くは其他の用に供せられることはないだらう、従て此の如き法則は無意味のものであると云ふことから、此法則を作る學問に對して非難をすることが出来る。是が第一の解釋に對する疑問であるが、次に第二の解釋に對しても又二様の非難の點がある、先づ世界史なるものを組立てるためには雜駁なる歴史上の事實を概括して一の系統に

編入しなければならぬ。併ながら斯の如き概括は、人の知識が貧弱である間は、却て大膽にすることが出来るかも知れぬが、種々の研究が發達し、歴史上の材料が豊富になればなるほど、特殊差別の點が著しく現はれて來て、殆ど之を概括する望がなくなつて來る。一國の歴史一時代の歴史と云ふやうなものも、今の所殆ど完成する見込がない、況や世界全體に通ずる歴史の如きものは全く無意味な空想に過ぎない。是が第一の非難の點であるが、次に假りに何かの方法で概括することが出来るかと假定する、從來も多少斯の如き世界史は現はれて居つたが、其場合には大抵世界の歴史的事實に或る意味目的を假定して、世界の古今の事變は此終局の目的に到達する一の段階道中であると解釋して、此目的に依つて雜駁なる事

實を概括しやうとするものが多い。斯の如くすれば、若干必要なる事件だけを選んで、他は拋棄すれば宜いのであるから、比較的容易に概括が出来るかも知れないが、併ながら此點に對しては又疑を懷くと出来る、即ち歴史上に果して目的を立てらるゝかどうかと云ふことである。世界の歴史は唯偶然の事變として、甲乙相繼ぎ起つて居るものである、世界は別に神の意匠に依つて生じたものでない、又人間が單獨の力で如何とすることも出来ないものであるから、自ら色々の原因に依つて種々の事變が起つて居るのであつて、之に目的を認めると云ふやうなことは、一の哲學的空想に過ぎないと云ふのである。丁度第一の歴史の法則を否定する人は、幾分か人間の自由人間の目的を認めて、之に重きを置いて説いたが、此

場合は其反對で人間を全く機械の如く考へ、自然物の如く看做して、其點から人間の行爲或は社會の變遷に何等の目的をも認めないのである。随つて概括をする中心點がないからと云ふ理由で、世界歴史の存在を否定しやうとするのである。是が歴史哲學の二つの意味に對する疑問であるが、此二つの疑問はそれ／＼別の根據から出て居るのであつて、甲の疑が成立つ場合には乙の疑は存在しないことになる。即ち歴史の法則を疑ふものは幾らか世界史の存在を認めなければならず、反對に世界の目的を認めない場合には、歴史の合法性を認めなければならぬことになつて来るやうに見える、即ち此二つは哲學で所謂アンチノミーを爲して居る、一方が立てば一方が破れると云ふ關係を爲して居る。斯の如くアンチノ

ミを爲す場合には何等か其處に調和の道があらうと云ふことが考へられる、同時に其各々の定理が即ち此場合では兩様の疑惑が共に絶對的確實なものでないと云ふことを示して居る。併し其事は暫く措て、吾々は先づ此疑問に對して一應辯解を試みて見たいと思ふ、而して又其辯解は少しく歴史及哲學の概念の中に含まれて居る意味を分析すれば容易に爲し遂げられることである。

第一に歴史の法則に對する疑に就て、先づ自由の意味を能く調べて見ると、人の自由は決して法則と矛盾して居らないと云ふことを發見することが出来る。或人は自由を以て全く法則のない、俗に言ふ我儘勝手と云ふ意味に解釋するが、眞正の自由は普通さう云ふ風に解釋することが出来ない。若

し人が時々刻々何等の順序連絡もなく行動して居るならば、それは唯各瞬間の意識を支配する外力に壓迫されて居るものと言はなければならぬ、即ち其人は毫末も自分自身の作用を爲すことが出来ないもので、全く外物に囚はれて居るものである。かゝる人は何等の自由を持つて居るものでない、之に反して眞の自由は其人の行動が一々其人自身の作用として生ずると云ふ場合に、初めて存在するものでなければならぬ。其故に其人の精神内に或る法則が行はれて居ることを認め、て初めて眞の自由と云ふことを説くことが出来るのである、心内に何等の法則もなく、唯外界の勢力に屈從するのは必然ではなくして寧ろ偶然の行爲である、即ち之を合せて言へば、自己の法則に従つて行動するのは自己の必然の法則に随つ

て居るのであつて、同時に前に言つた通り自由である。夫故に自由と云ふ概念は常に必然的法則の概念と一致し得るのである、随つて歴史上の題目たる人間は自由を持つて居るが、併ながら決してそれが爲めに法則に合して居らないと云ふことは出来ない。即ち第一の疑問は誤まつた自由の解釋に基くものと言はなければならぬ。次に所謂歴史的法則が形式的で内容がないと云ふ點から、歴史哲學を非難するものに對しては吾々は斯う答へたい。總て如何なる學問も唯事實を列擧するものではない、何等かの法則を發見し、若くは其實を適宜に按排しなければならぬ、其結果は決して事實の直寫ではなく、幾分かづゝ實際の事實と離れて來る。随つて其學問に表はれる事實若くは法則は、何れも皆非實質的即ち形式

的の性質を帯びて來るから、獨り歴史上の法則のみを形式と言つて非難することが出來ない。若し假りに歴史に就て若干の法則が発見されるならば、假令其法則が頗る抽象的のものであつても、少しも學問たるに差支はない、又總ての學問は皆此種の抽象的の法則を材料にして相應の効果を擧げて居るのであるから、歴史の抽象的法則も亦何かの場合に效能を爲さないと斷言することが出來ない。故に徒らに歴史の法則を無意味であると言つて、非難することは當つて居らない。斯の如くにして、先づ吾々は第一の意味の歴史哲學の疑問に對して答へるものが出來る。

次に第二の世界史としての歴史哲學に對する疑問に對して答へて見やう。第一の疑問は概括の困難なる事から世界

史の存在に對して發せられることであるが、成る程事實が多く發見されれば、昔日のやうに容易に概括をすることが出来ないであらう、一方には特殊事實の穿鑿をするものが益々殖えて、其方の事業が益々綿密になるべき筈であるが、併し一面には又統一作用も無視することが出来ない。總ての知識は皆若干の概括を試みる所に存在して居る、一方に特殊細密の事實を發見すると共に、其事實を一般の系統中に編入し、若しくは從來の系統を改造して更に大きなものにするると云ふ所で、初めて知識若しくは學問の意味が成立つのである。唯細かい事實を探ぐることのみが決して學問ではない、而して又細かい事實を探り盡すまでは、決して學問が成立たないかと云ふと、それは實際の場合に於て反對の證據に依つて直に否

定されるところと思ふ。成程完全を期すれば、總ての事實が悉く探り盡されるまでは、何時今までの論斷を顛覆するやうな事柄が發見されるかも知れぬから、輕率に概括をして絶對的の原理を組立てるとは出來ないが、併ながら今まで獲取し得た知識に相對的な概括は常に試みる必要があつて、又始終行はれて居る種々の科學は皆それを実行して居る。成程其概括は科學の進歩に隨つて、常に變つて行くであらうが、併ながら或る時期には其時の概括が確かに效能をなし眞理であつたのである。して見れば後の時期にそれが變革されても少しも悔ゆるに足りない、即ち其概括は自分の盡すべき任務を果して仕舞つたからである。要するに特殊の研究と概括とは常に提携して行はれると思ふ。此意味から總ての科學の研究

が成立つと同時に、科學に對して哲學が存在の理由を持つと
が出来るのである。斯く見ると歴史上の事實には益々新ら
しい發見を見るにあらうが、併しそれにも拘らず一方には
今まであつた若干の事實に據つて、相對的に確實な概括をし
て、一國の國史若くは時代史等を作るものがなければならぬ、
之と共に又或る時代の全般の知識に相對的な世界の歴史を
作る希望が全くないと云ふことは出来ない。夫故に世界史
の概括は、論者の言ふが如く全く不可能なものではないし、又
不必要なものとも考へられない。斯く第一の概括の點は辯
じることが出来たが、次に歴史に目的ありや否やの疑問に答
へなければならぬ。もし世界過程に何か目的があることと
すると、此目的に依つて既に述べた通りの概括を試みることに

が出来来るやうであるが、併し此目的の存在に對して根本的に疑惑を呈するものがある。成程人間の事變を一面から見れば、唯偶然事變の連續の如くにしかならぬが、併し又見方を變へて考へて見ると、先づ個々の人間の個々の行爲と云ふものが、何れも皆直接間接の或る目的を持つて居るとは誰れも認めなければならぬ。然らば其行爲の統一體に對しても即ち人生全體の行爲に對しても、何か或る目的を認めると云ふとは必ずしも出来ないとはではない。尤も個人の目的を認めることは出来るが、併し人間の集合體に對しては目的を立てることが出来ない、と云ふやうな疑問が起り易い、即ち個々の人はそれ〴〵意識的存在物である、従て一の統一體となるが、併し人類の團體は果して同じやうな意味で意識的と云ふ

ことが言へるかどうかと云ふことは疑問である。之に對して或は社會意志と云ふやうなものを説いたり、或は集合意志と云ふやうなものを認めたりする考方もあらうが、何れにせよ、團體の意志は個人の意志に比べれば意識的の性質が絶無でなくとも、僅少であると言はなければならぬ。併ながら假りに殆ど絶無と見做しても、それでもそれが爲めに團體の所業に或る目的を立てると云ふことは不可能でない。普通無機物に對しては、目的の存在を認める人は少ないが、併し有機物即ち動植物の發生、官能等に對しては、無意識的の目的性を認めなければ説明が出来ない場合が多い。動物の本能が或る目的を明かに持つて居ると云ふことは出来ないが、併し自ら或る目的に適ふやうな状態になつて居ると云ふことは事

實上疑ふことが出来ない。さうして見れば社會即ち人間の集合體に對しても、たとひ意識的の目的がないとしても、尙ほ無意識的若しくは微小意識的の目的を許すことが出来るであらう。さうすれば宗教上若しくは哲學上の或る特別の假定に依らないでも、普通の或は極端な唯物論者の立脚地からしても、世界史に或る目的を認めて行くことは、必ずしも困難ではない。随つて世界の歴史は世界の審判であると云ふやうな定言も無意味のことではなく、古今の事變は或る原理或る目的に依つて統一され、概括されて行くことが出来ると言つても差支あるまい。

斯の如く、要するに是等の疑問は、歴史及哲學の兩概念の分析が不完全なるために、徒らに矛盾を認めて其合一を説くこ

とが出来ないのによるものと言はなければならぬ。即ち一口に言へば歴史上の意志自由は、必ずしも哲學若しくは科學の求むる合法性と反對でなく、又歴史的事實の特殊性無意識性は、哲學的概括の普遍性目的性と並馳し得べきものであると思ふ。即ち歴史哲學を何れの意味に解釋して見ても、必ずしも其成立を説くことは困難ではない。

二

併ながら以上述べた疑惑と解答とは共に共通の假定がある、而して其假定は共に終極の分析に達して居らないから随つて以上の疑惑も誤で、又それに對する解釋も絶對的に眞實のものとして認めることが出来ないことになる。疑惑が既に

誤つて居る、或は寧ろ淺薄と言つてよかろう、其故に解答も亦誤つた或は分析不完全な立脚地から説かなければならないやうになつて居る。所謂牡山羊を搾乳する者があると箕を以て之を受けやうとする者があるの類である。吾々はもつと根本的の疑惑を掲げ、もつと根本的の解答をすることを試みて見たいと思ふ、同時に歴史哲學の意味を以上述べたことの外に求めて行きたいと思ふ。即ち以上の意味の歴史哲學は割合に古い問題であるが、吾々はもつと新しい意味の歴史哲學を提供して見たいと思ふ。然らば何が共通の假定であるかと云ふに、是等の疑惑も解答も共に、哲學と歴史或は知識と其對象とを共に客觀的、超越的、實在と見做すことである。上に述べた所で法則とか概括とか云ふことは一の哲學的知

識である、自由とか目的とか言ふことは哲學的知識の對象である。所が今までは是等の兩者を共に客觀的の意味に解釋して居つた、隨つて彼等の認めて居る歴史は、純粹の客觀的事實の記述でなければならぬ、又彼等の思つて居る所の哲學は、超越的知識である所の形而上學である、即ち二つの客觀的の、全く關係のない、歴史と云ふ對象と哲學と云ふ知識とが歴史哲學と云ふ概念で以て合一することになるのである。如何して斯の如き無關係のものが合一することが出來やうか、其合一の歴史哲學は今までの説明あるに拘らず、依然奇蹟であると言はなければならぬ。其故に吾々は此新しい問題を解釋するために、考察の方法態度を變更しなければならぬことになつて來た、即ち先づ哲學の意味を新たに研究して、それ

から解釋の端緒を求めて見やう。今までの解釋によれば哲學は形而上學であつた、即ち哲學は超越的實在の學問であつた。併し斯の如き實在即ち主觀に關係のない客觀と云ふものは、決して直接に與へられるものでない。或は漸次知識の發達の上で斯の如く超越體を假定する必要がある場合があるかも知れないが、初めから斯の如き實在を認めて行くことは出來ない。吾々に直接に與へられるものは何れも皆主觀に關係のあるものである、即ち意識内の事變でなければならぬ。意識を超越し普通の經驗の範圍を超越した世界は決して初めから假定をすることが出來ない、或は結局さう云ふ状態に達することが出來ないかも知れないのであるが、斯の如き超越體を假定して行く態度は、一般に獨斷的と名けられて

居る。通常哲學を定義して原理の學であると言つたり、或は哲學は絶對の學なりと云ふやうなことを言つて居る。此場合に於ける原理とか絶對と云ふことは往々にして斯の如き超越的の意味を持つて居るものと考へられるが、今日の哲學の解釋では、斯の如きものは次第に認められなくなつて來て居る。哲學の出發點は結局意識内の直接經驗に外ならない、而して純粹の經驗は本來主觀客觀の無差別のものであるが、併ながら人々の意識が發達すると共に、此無差別なる有りの儘の經驗に對して反省を加へて、其中から主觀客觀の兩要素を分析して行くのである。今日普通に此兩者は全く知識上分れたもののやうに看做して居るが、併し元來が此二つは渾然たる一體となつて經驗を組立て、居るものである、而して

此經驗以外には何等の知識の對象もない。それで哲學の任務は先づ此分れた主觀客觀の二要素を統一して、分析の結果として生じたる複雑なる經驗を整理することに歸着するのである。夫故に哲學の問題は先づ客觀と主觀との關係に關する批評的考察である、直接純粹の經驗の中から反省作用に依つて暫く分析したる兩要素の關係、即ち如何にして主觀と客觀とが合一するか、主觀的認識が客觀的妥當性を有し得る根據は如何と云ふことを論ずる認識論と此認識の成果たる知識の組織を論ずる所の論理との此二つの部分に分れて來る。換言すれば元來客觀と主觀とは一體であるが、併し思惟を廻らすことの出來る人間は、皆此二つを別のものとして認めて居る、即ち意識的主觀と意識内容となつて居る所の客觀即ち

俗に言ふ事物との、此二つを分別して考へて來るから、隨つて此處に新たに問題が起るのは、どうして吾々が意識外の客觀を意識内に取り入れて認識する事が出来るか、と云ふことである。認識は主觀的作用である、どうして此主觀作用が客觀に當篋まることが出来るかと云ふことが問題になる。若し普通の形而上學者の言ふやうに、客觀は客觀で全く純粹の非主觀的のものであり、超越的のものであるとしたならば、到底此問題を解釋することが出来ない、それで何か或る理由に據つて、例へば經驗の根本に溯れば本來主觀客觀の別がないものであると云ふやうな理由に基いて、主觀と客觀との合一を説明しなければならぬ、此點を論ずるのが即ち認識論であつて、其認識の組織を論じ、種々の知識の價值を定めるのが論理學

である。是が詰り哲學の第一の問題であるが、之を總稱して知識學と言ひ、此考察から初めて行く所の哲學討究の態度を批評的と稱して居る。我々は之によつて我々の有つて居る客觀的知識の確實なることを論證する、而して斯う云ふ研究から段々と進んで行つて、遂に客觀的實在其物に關する研究即ち形而上學を組織することが出来るかも知れないが、併ながら其形而上學は昔から言ふ形而上學の如く、全然超越的な純粹の客觀的實在の學問ではない、何等か主觀的の性質を含んで居る客觀、何等かの方法で超越的になつた實在の學問とならなければならぬ。均しく之を形而上學と云ふ名で呼ぶが、併ながら其形而上學は既に述べた如き獨斷的のものでなくして批評的のものである、即ち其基礎が既に前に述べた知

知識學に存在して居るものである。其故に哲學は分れて知識學及形而上學となるのであるが、併ながら先づ形而上學を説くまでに、知識學に於て論及すべき點が澤山あるのである。

此の如く哲學を先づ知識學と解釋したならば、哲學は知識即ち科學の確立を論證するものとなるであらう、換言すれば科學の可能性の論據を證明するものとなる。即ち哲學は先づ知識批評と解せられる。初めて知識批評の業を明かに述べた所の人はカントであるが、カントは其業に依つて、當時の學界に於て非常に勢力のあつた又進歩して居た自然科學の成立可能を證明した。カントの考へる所に據ると、我々は自然を造るものである、吾々も一個の自然物と見れば無論自然界の一產物であるが、併し自然を認識し自然に關する科學を

組織すると云ふ立場から言へば、其場合には認識者たる我々は認識される自然を認識し得るやうな形に組立てゝ行くのである、と云ふのは、認識し得る自然と云ふのは皆主觀的の法則に依つて統一せられて居るものであつて、此統一以外の自然それ自身は認識に對しては何等の關係を持つて居らない。換言すれば主觀的の形式に當倏らない、物の本體は到底主觀の認識作用には這入つて來ない、例へば吾々の認識は時間空間の範疇に依つて形造られるが、是等の形式に這入らない物其自身は認識されることがない。其故に認識の對象たる自然、即ち自然科學に所謂自然は、主觀の作つたものであると云ふことが出来る。隨つて自然科學即ち自然に關する法則の總括が成立つと云ふことは、自然界に法則が存在する故であ

ると云ふ譯でなくして、自然科学は法則に合する自然のみを論ずるが故である、と云ふことに歸するのである。カントは斯の如くにして從來の哲學者が言つて居つた獨斷的形而上學としての自然哲學、即ち自然の本體に關する哲學に對して、知識學としての自然哲學の業を始めた。換言すれば今までの自然哲學者は、自然に關する形而上學的原理を發見しやうとして居つたが、カントは自然哲學を以て自然科学の批評即ち自然科学の可能性を論ずる學問としたのである。

今此理を歴史哲學に應用して見ることが出来る、さうすると初めに述べたやうな二つの解釋、即ち歴史の哲理若しくは哲學的歴史は、共に形而上學としての歴史哲學であつたが、之に對して全然新たな知識學としての歴史哲學を説くことが出

來るのみならず、批評的の立脚地から見たならばカントの言ふやうに自然は主觀の所造であると言ひ得るが如く、**歴史的事實も亦主觀の統一に依つて初めて史學的知識上の事實となるべきものである**と言はなければならぬ。勿論**歴史的事實は客觀性を持つて居るが、併ながら純粹の客觀的の事實は到底知識となることが出来ない**、随つて**歴史の學問を組立てることが出来ない**。歴史に關して何かの統一を認め、**丁度自然に關して科學を作るやうに、歴史事實を一の歴史的知識に組立てるためには、何か其處に主觀の働がなければならぬ**。併ながら單純なる主觀の知識が決して**歴史的知識とならないこと**は、恰も自然に關する空想が決して**自然科學となることが出来ない**と同じことである、**歴史哲學の事實は飽くまで**

客觀的であると云ふことは、自然が客觀であると少しも變りはない。此客觀がどうして主觀と關係するか、一體歴史的知識の性質はどう云ふものであるかと云ふやうなことは、歴史事實の眞偽を研究したり或は歴史編纂の事業に没頭する外に、一個の學問として地歩を占めることが出来るし、逆に史實研究に對して、何等か貢獻する所がないと云ふことは出来ない、是が吾々の新たな意味の歴史哲學として提出せんとする所である。

知識學としての歴史哲學の問題を大別すれば、丁度知識學が二つに分れた通り矢張り二部となる、即ち一は歴史の認識論であつて、一は歴史の論理學である、尙ほ之を細別すると次の如きものになる、而して之には其れく其の系論として方

法論が附隨する。

歴史の認識論	史的知識の意義	可能	史的事實の理會の可能
歴史の論理學	史的知識の性質	價值	史的事實の構成の可能
			史的事實の合法性
			史的事實の目的性

今之に就て簡単に説明をして見やう。

三

既に前に議論の端緒を開いた通り、歴史的事實は客觀的である、而して歴史的知识は主觀の作用であるとしたならば、此兩者は如何にして合一し得るか。茲に歴史的知识の意味を明かにして、其可能性を説くことの必要が生じて來るのであ

る、是が即ち歴史の認識論の問題である。此場合は丁度自然科學に於ける認識論と大體に於て少しも異つたことはないが、唯少し異つた點は、普通の認識論では認識の主觀と認識の對象とが、一見した所で性質の異つたものである、即ち認識の主觀は精神的であるが、認識の對象は物質的若しくは少くとも非精神的のものであると言へる、然るに歴史の場合には主觀も客觀も共に精神的であることは、歴史認識論の問題を初めて明白に提供したジムメルが注意したことである。斯の如く主觀も客觀も同一な精神であると云ふことは、却て此主觀客觀の合一に關する問題の必要を、蔽ふやうな結果を生じて來て居るのであるが、併し同じ精神的作用でも歴史的事實となつた場合には、確かに客觀的であるから、此場合に於ける

主觀客觀の合一問題は、他の場合の認識論の時と少しも異つたことはない。

此認識論に對して上に圖解したやうに、二つの問題が分れて來る。吾々は先づ普通に歴史的事實を容易に理會し得ると信じて居るが、此事に關して第一に論究しなければならぬ。若し歴史的事實が或る論者の言ふやうに純粹の客觀的であるとしたならば、どうしてそれを認識することが出來やうか、換言すれば主觀的な歴史的知识が、どうして客觀的の史實に當嵌まることが出來やうか。純粹客觀的な即ち超越的な歴史的事實を認識し得ることが出來ると思ふのは、丁度哲學で意識の形式を離れた物其自身を、無造作に認識し得ると思ふやうな論者である。是に於て客觀主義を主張したランケ派

は此困難を避けるために、一種特別なる認識作用を假定しやうとして居る、丁度哲學上意識の直覺に依つて、物の本體が分ると考へる人がある通り、歴史感なるものがあつて、是に依つて客觀的事實を捕捉することが出来る、と云ふやうに論じて行くのである。此論は非常に素朴的な常識的な論か、若しくは非常に哲學的形而上學的の論であるが、併し斯の如き特別なる感覺作用を認めると云ふことは困難である、從て純粹の客觀的事實と云ふものは、實際に於て到底知識にはならないと言はなければならぬ。無論歴史家は公平を期せなければならぬ、隨つて出来るだけ自己の偏見等を去らなければならぬが、併ながら其偏見を去ると云ふことと、純粹の客觀を求めると云ふこととは、必ずしも一致して居らない。如何に偏見

を去つても純粹の客觀が現はれるものではない、同一物でも見様に依つて總て變つて現はれて來るが、其差別は成るべく没するやうに努めるとした所が、或る若干の事實を統一しそれを一の知識に組立てる時には、どうしても自己の統一作用が行はれて來なければならぬ、即ち其處に何かの主觀的形式が混入して來る。一般の認識論に就て見ても、今日如何なる人も素朴實在論を信ずる者がない、それに對して必ず或る意味の主觀論客觀論を認めて居る。即ち吾々の認識して居る外物は決して物其物でなくして、吾々自身の主觀的形式に依つて、幾らか變形したものであると認て居る、換言すれば吾々の觀念は外物の模寫でなく、外物を理會するに必要な先天的範疇に依つて改造されたものである。斯の如きことは矢張

歴史上の事實に就て言ひ得るのであるまいか、即ち歴史上の事實も純粹の客觀的ではなくして、若干の歴史的範疇の如きものに依つて變形されたものでなければならぬのではあるまいか、ジムメルは斯の如き範疇を「歴史的、先天的」と名けた。其如何なるものが「歴史的、先天的」になるかは、歴史哲學に於て論究する問題であるが、同時に此歴史的、先天的は、當然後天的即ち經驗的要素と區別すべきものであるとは、今此で明言し得る。随つて歴史家自身の特別な經驗から生じた種々の偏見或は意見等は、此の史的範疇と混同してはならない。カントの哲學に據れば、感覺や感情等は皆後天的のものである、之に對して直觀の形式即ち時間、空間や悟性の形式即ち範疇等は先天的と稱せられるが、斯の如き種類の先天的形式を、吾々

は又歴史的知識の場合にも求めなければならぬと思ふ。此統一があつて初めて歴史的知識が成立する、然し此形式は全く先天的、同時に抽象的であるから、随つて此形式に依つて統一された場合には、歴史家の特別な意見の混入して居る所の所謂史論の如きものが、決して歴史上に意義を持つものではない、と云ふことを論斷することが出来る。即ち我々の論は決して偏頗な歴史を辯護しない、寧ろ之を排斥すべき根拠を示して居ると思ふ。今は此史的範疇等に論入する違はないが、試みに此形式になるものを挙げたならば、論理的法則、心理上の一般の法則、并に法則の所有者即ち歴史家の人格的統一即ち自我などが重もなものである、殊に自我が即ち其根本の統一と同じものであらうと思ふ。尤も其所謂經驗的後天的要

素から獨立なるべき自我は如何なるものであるか、といふことは、歴史哲學其物に於て詳しく論じなければならぬことであつて、茲には唯其一例として之を提供したに過ぎない。

此認識論の問題から系論として生ずる結果は歴史學の**方法論**のことであつて、即ち歴史の研究法上史實偏重に對する**非難**を下し、寧ろ主觀的統一即ち**史實の見方**に重きを置かなければならぬと云ふやうな結論を導き出すことが出来るであらう。即ち或る歴史を編成する場合に、史料の完成を待つたり或は絶對的の確實な歴史を求めたり、しやうと云ふことは、共に無意味であると云ふことが、方法論上の結論として生じて來やうと思ふ、蓋し歴史事實は一面主觀的たる限り到底相對的たることを免れないからである。

然るに歴史事實は單に理會せらるゝのみならず又構成せられなければならぬ。歴史は唯抽象ではない、井ンデルバンの言つたやうに、一の形體を備へて現はれて來なければならぬ、即ち直觀性を帶びて來なければならぬのであるから、歴史に於て吾々は斷片的なる事實を統一して理會して更に之を實際にある如く、描出しなければならぬ。元來歴史事實は今述べた通り主觀の統一に依つて生じたものである、即ち換言すれば歴史的事實は我の統一に依つて作出して之を外に投射したものであるが、此の如き史實を吾々が再び逆に我の中に投射して、恰も外部にあるものを認めたかの如き感じをしなければならぬ、實際は内部の主觀に依つて出來上つたも

のであるに拘らず、恰も外に完全に備はつて居るものであるが如く認め得なければならぬ。即ち歴史家は此に空想作用を用ゐて、生命のない記録上の歴史事實を恰も實際に起つて居る如く完全な形にして現はし出さなければならぬ、其意味に於て歴史は正しく一種の藝術と同じものである。ジムメルも、歴史は一の藝術であると言へるが、それは歴史を作るといふこと其事が藝術であるといふ意味で、歴史を藝術的の形で表はすと云ふこと、即ち美文で編述すると云ふやうな末の事ではないと言つて居る、それが正しく此趣意である。其故に歴史は唯理會されるのみならず再現されて構成されなければならぬ、其再現の不完全なる場合には歴史は唯史料たるに止まつて居る。然らば歴史事實の再現とはどう云ふこ

とであるか、又藝術上の再現と如何なる異同があるかと、云ふことを論究しなければならぬ、是が歴史認識論の第二の問題となつて居ることである。此問題の系論として方法論上史料と歴史との區別を説き得ることは今既に述べた通りである。

以上の論據に基いて普通の歴史形而上學に於て論究せられて居る所の歴史上の法則並に目的の問題が新たな批評的見地から考察せられるやうになつて來る、即ちこゝに古い問題が新しい形で提出されるのである。我々は法則及目的其ものを論ずるに先だつて、如何なる意味で歴史が法則に合し目的を具へて居ると言い得るかと云ふことを定めなければ

ならぬ。即ち之に依つて歴史的知識が知識の系統上、他の知識即ち法則目的等を説く知識體系に對して占めるべき所の位置を明かにすると出来る。即ち歴史的知識の組織に關する問題であつて、之を論究するものを名つけて歴史論理學と云ふ、即ち歴史的知識の性質を明かにし一般的知識に對して有する價值を示すものである。其問題を分けて上に述べた通り合法性の問題と目的性の問題との二にすることが出来る。歴史的法則は果して自然法則と同一であるか或は異つて居るか、前に述べた歴史的認識論の場合に「歴史的『先天的』として認めなければならぬとした所の根本的法則の外に、諸種の派生的法則が出来るとしたならば、是等の法則が果して自然科学上の種々の法則と同一の性質かどうか、又そ

れを研究する方法も同一であるか否と云ふことに關しての議論が出て來る。此問題に依つて同時に歴史的知識即ち歴史學の學問上の位置を定めることも出来る。此點に於て學問分類上の種々の意見が分れて居る、即ち歴史學を一の特別なる學問として自然科学と區別しやうとする派があるし、又歴史學を精神科學の一部分として自然科学に對立させやうとするものもある、前者は例へばキンデルバンドの如きもので、後者は例へばヴェントの如きものである、前者に於ては學問の分類上歴史學の特別なる性質が非常に重大な關係を成して居る。之に關聯して歴史學と自然科学との研究法の問題も生じて來るので、之に對して自然主義、心理主義、論理主義の三派が分れて來る。自然主義の中にも唯物論派がある、歴史

を經濟上の法則に依つて説明しやうと試みるマルクスの説や、或は其他氣候風土等の外國に依つて一切の歴史現象を説明しやうと云ふ諸派がある、又歴史の研究法を他の自然科学の研究法と少しも區別する必要がないと考へて居るリールなどの意見もある。次に心理主義と云ふのは心理上の法則に依つて歴史事實に若干の統一を試みやうとするものである、ラムプレヒトなどは其代表者である。最後に論理主義と名けたのは歴史學の研究法と歴史的法則とが他の自然科学の研究法及自然科学の法則と論理的の性質を異にするものであると考へる派で、即ちキンデルバンド、リッケルト等の派である。是等の問題は方法論の問題と錯綜して歴史の研究の上に種々の影響を與へなければならぬ、即ち自然主義の解

釋に依るのとは編成された歴史の上に非常な相違が出来る。又一切の理論を排斥して是等の主義を全く認めない場合には、果して完全な歴史が出来るかどうか、是も研究する値がある。是等の點は歴史論理學の第一の部分が明かにすべき問題であると思ふ。

斯く歴史的事實に法則を認めると共に、其歴史的事實にも目的の觀念を入れて解釋すべきものであるかどうかと云ふことが歴史論理學の第二の部分を形成して行く。目的を全く超越的の客觀的のものとしたならば或は種々の議論もあるであらう、併し歴史的事實其物が主觀的統一に依つて成つて居るものであるとしたならば、其目的は確かに主觀的意味を持つて居るものでなければならぬ、即ち人々の價値

の觀念に相對的なものでなければならぬ。歴史的事實に對して吾々は主觀的の統一を施すと共に此に取捨選擇を施す、其場合には如何にしても事實の評價をすると云ふことは避けることが出来ない、随つて歴史的事實の價值を論じ歴史の終局の目的を何かの意味で論じて見る必要があるになつて来る。例へば或る人は之を文化と云ふことに歸着させるかも知れない、さすれば其文化の意味は果してどう云ふことであるかと云ふことに就て種々論究を試みる事が出来るのである。此價值目的は決して狭いものであつてはならぬ、随つて歴史的價值或は歴史的目的の研究は歴史を偏狹なる道德主義或は政治主義に依つて組織することの不可なることを方法論上の系論として導いて來ると思ふ。倅然らば斯の如

き小さな價值（小）な目的を排斥した後で生ずべき眞の歴史
的價值は如何なるものであるか、價值の内容は論理學で説く
とは出來ぬが、其要件の何たるかは歴史論理學の第二問題と
して論じて行かなければならぬことであらうと思ふ。

四

斯の如くして知識學としての歴史哲學は歴史哲學の終局
に至つて遂に價值の觀念を伴つて來た。個々の價值は個々
の事實に就て研究すべきものであるが、併し若し吾々が價值
の系統を求め、絶對的價值を定めやうとする場合には（無論絶
對は比較的事實のことであるが）其場合にはどうしても一切の事
實を概括する知識に依らなければならぬ。即ち絶對的價值

若しくは價值其物を論ずる所の學問を求めなければならぬ、獨り歴史の價值ばかりでなく世界全體の價值を論ずる學問に没入しなければならぬ、即ち此に終局の實在の問題に這入らなければならぬ、此問題は即ち形而上學の取るべき任務であるとしたならば、此に歴史の知識學に基ける所の歴史上の形而上學と云ふものを新たに生ずるであらう。狭い意味の哲學即ち形而上學は井ンデルバンドなどの解釋に依れば普遍妥當的價值の學である、然らば歴史に關して絶對的價值の一部分を應用すると云ふことは決して不當なことではあるまい、即ち是が歴史哲學の一の問題となるだらうと思ふ。此の如くして前に言つた通り歴史哲學は先づ知識學より始まつて遂に第二の形而上學の部分に入り、古い學問が新しい形

で現れて來るのである。

併し此形而上學の問題を暫く問はないで置いて、吾々は知識學としての歴史哲學に於て大に論究すべき點がある。即ち此歴史哲學は歴史研究の存在し得ることを證明すると共に、其正當なる方法の根據を批評するものである、歴史が單に斷片的事實の集合でないと云ふことを明かにするものである、歴史的事實に對する主觀的作用の意味を定め、同時に其制限を明かにするものである。「歴史は歴史以上なり」と云ふ語があるが、此パラドックスの意味は歴史哲學によつて歴史が普通の歴史以上になると云ふとである。之に依つて見れば歴史哲學は個々の歴史研究には直接には無用であるが、併ながら個々の歴史研究の終る時若しくはその始まる前に

其基礎となるもので、此點に於て又一種の實用をなすものとも見ることが出来るであらう。

(明治四十二年二月十三日講演)